

# 万葉集卷十七「七言晚春三日遊覽一首并序」について

島村良江

## 序

七言晚春三日遊覽一首并序

上巳名辰暮春麗景。桃花昭臉以分紅、柳色含苔而競綠。于時也。携手曠望江河之畔、訪酒過過野客之家。既而也。琴罇得性蘭契和光。嗟乎今日所恨德星已少歟。若不扣寂含章何以攄逍遙之趣。忽課短筆聊勒四韻云尔。

餘春媚日宜恰賞。上巳風光足覽遊。

柳陌臨江縹絃服。桃源通海泛仙舟。

雲疊酌桂三清湛。羽爵催人九曲流。

縱醉陶心忘彼我。酩酊無處不淹留。

天平十九年暮春に行われた家持と池主の贈答は、近年諸氏によつて活発に論議されてきた<sup>(1)</sup>。しかし、池主による

「七言晚春三日遊覽一首并序」に関しては、未だ詳細な考察がなされていないように思われる。そこで改めてこの詩序を見直してみると、「交友」と「上巳」が諸処に巧妙に詠み込まれていることが分かる。一連の贈答歌群は交友とあり、その点からも当該詩序を考察し直す必要が感じられる。本稿では、七言晚春三日遊覽一首序（以下、当該詩序）に見られる「蘭契」「德星」、そして七言詩中（以下、当該詩）の「仙舟」について取り上げ、その典拠および中国文学における例との比較検証を行い、当該詩序の構成と内容について考察する。

「蘭契」「德星」に関して注目すべき論がある。中村宗彦氏は「蘭契」は「蘭蕙」、「德星」は「德音」と記されるべきであったとの誤写説を提出している<sup>(2)</sup>。「蘭契」に関し

ては、これまで典拠として『易経』繫辭上伝「二人同心、其利斷金。同心之言、其臭如蘭」があげられ、異説はほぼ見られない。しかし『代匠記』精撰本では「蘭契」へ光ハ契ハ禊ナルヘシ。」と誤字説を指摘する。中村氏は「蘭契」について、

(イ)「蘭契」という語は存在しない。『代匠記』も「蘭禊なるべし」と疑っている。

(ロ) 仮に「蘭契」の語があったとしても、それは「蘭の如く芳しい君子の交わり」であるから、その光を和げることは尊重すべき芳情を減じてしまうことになる。「和光同塵」は自己の光明を表さないうで世俗に同化することをいう。切角の「蘭契」を和らげて何にならうか。

と二つの疑問点を提示した上で、「蘭契↓蘭蕙」の誤写説を試みに提出している。何故「蘭蕙」かと言え、

(24)の詩序(当該詩序のこと)は(22)三九六七の、三月二日の池主の家持宛書簡に続くものであるから兩者の表現に共通点が見られるはずである。事実、(22)蘭蕙隔叢 琴罇無用(24)琴罇得性 蘭契和光と語順を換えて反復したとみられる箇所がある。(22)では蘭と蕙、琴と罇を対しているのに(24)では蘭契、琴と罇と、わざわざ対偶を破って編文するなど、対偶を

文章の生命として重視する当時の文章観からも理解し難い。(22)(24)の文は当然同一表現意識によるものとし、(24)の「蘭契」は同音に引かれて「蘭蕙」を誤ったものとみるのが自然である。

とする。同様に「徳星」誤写説を提示し、その理由として、

(イ)『代匠記』に「異苑陳寔字仲弓。荀淑字季和。

仲弓與諸子姪造季和父子討論。于時徳星聚。太夫奏曰。五百里内有賢人聚。」を引き、「家持を闕故に、已少歟と云へり」と注する。然れば「徳星聚」とは家持以外に池主等一・二名が加わる座をいうことになる。家持のみを贅えて徳星というならともかく、自己をも徳星賢人に比するような不遜な表現を池主があえてなすはずがない。(中略)

(ロ)「徳星已少歟」とは、徳星が「有道の国」に出るものであれば、現在の治政を無道と見なすのも同意となる。『史記』天官書にも「天精而見景星、景星者徳星也。其状無常、出於有道之國」と記す。少なくとも周知の語とは言い難い「徳星」なる語を池主が特に使用したとすれば、当然彼はこの「徳星」の語の意義・背景を充分弁えていたはずである。律令制下の忠実な官僚たる池主がわざわざかかる不穏当な語を用いた書簡を家持に呈上する必然性があるうか。

(ハ)更に「徳星已少」という表現も落ち着かない。「全くない」とは普通表現しないし、「少い」に係るのであれば「已」は「甚・太」の義であるはずである。

(中略)

以上三点の理由から、「徳星」は当該詩序にふさわしくないと言う。そして「徳星」は「德音」の誤写であり、文意は「今は、怨めしいのは、あなたのお便りが甚だ少ないこととです」となると言う。「徳星」が極めて稀にしか用いられないのに対して、「德音」ならば集中巻五・八一一、八一二番に用いられているし、三月五日池主書簡中にも見出せるからというのが、その理由である。

まず「蘭契」についてだが、中村氏は「『蘭契』という語は存在しない」というが、「金蘭契」「芝蘭契」の一部として「蘭契」は認められる。詳細は後述するが、従来「蘭契」の典拠と指摘されてきた『易経』繫辞上伝より生じた「金蘭契」の他に、『孔子家語』六本を典拠とする「芝蘭契」の存在が「蘭契」を考察する上で重要であると思われる。「徳星」誤写説に関して言えば、この表現が集中に稀にしか見られないと言うのであれば、三月二日池主書簡中の「淡交」も同様である。詩句解釈は作品全体を鑑みてなされるべきである。「徳星」については、当該詩中の「仙舟」との関係について改めて検討を加える必要があると思

われる。なぜなら、この「徳星」と「仙舟」は、その成立背景となった逸話が交友を主題とし、かつ両逸話が類話と見なされているからである。

## 一 蘭契

「金蘭契」から「蘭契」へ

当該詩序に「蘭契」という言葉がある。意味は、「蘭とは心のよく合った交わり。親しい交際。蘭交」<sup>③</sup>。「蘭の香のように美しいまじわり。親友のまじわりという。金蘭のまじわり。蘭交」である。『万葉代匠記』初稿本には「蘭契<sup>④</sup>和光、易云。同心之言其臭如<sup>⑤</sup>蘭。」とある。「蘭契」に関しては、略解・古義・大系・全集・釋注・全注なども代匠記同様の見方をしている。『万葉集全注 卷第十七』では「『蘭契』は蘭の花の香のような清い交わりで、君子の交わり。易経によること代匠記以来の指摘がある。」<sup>⑦</sup>と説明する。「蘭契」の典故もしくは用例としてあげられている『易経』繫辞上伝とは

二人同心、其利断<sup>⑧</sup>金。同心之言、其臭如<sup>⑨</sup>蘭。

〈正しい心情の持主が二人して心を合わせれば、その鋭さは金鉄を断ち得るほどであり、心を同じくする者のことばは、蘭の香りのごとくにかぐわしいものである。〉<sup>⑧</sup>（『易経』繫辞上伝）

である。この『易経』繫辞上伝の一節から派生したと考えられる表現に「金蘭」がある。金蘭とは「同心の友の交わりの固いことは金を断つほどであり、其の美しいことは蘭よりも芳しい。極めて親密な、交わりの喩。」である。『初学記』交友へ事対には「金蘭へ周易曰、二人同心其利断金、同心之言、其臭如蘭」とある。中国文字中では

山公與嵇阮一面、契若金蘭。〔世說新語〕賢媛十九

自昔把臂之英、金蘭之友。〔文選〕劉峻「広絶交論」

欽洽金蘭。〔駱賓王「夏日遊德州贈高四序」〕

金蘭篤惠好。〔岑文本「冬日于庶子宅各賦一字得平」〕

金蘭徒有契。〔陳子昂「同旻上人傷壽安傳少府」〕

同心三人則金蘭。〔王勃「夏日登龍門棲寓望序」〕

道合忘筌契金蘭。〔駱賓王「秋日與羣公宴序」〕

分定金蘭契。〔白居易「代書詩一首百韻寄微之」〕

などがある。また『懷風藻』にも

一面金蘭席。〔調古麻呂「五言初秋於長王宅宴新羅客」〕

有愛金蘭賞。〔長屋王「五言於宝宅宴新羅客一首」〕

願言若金蘭。〔塩屋古麻呂「春日於左僕射長屋王宅宴」〕

が見られる。「金蘭」を基として「金蘭契」「金蘭友」等の言葉ができた。ところで「蘭契」は「金蘭契」もしくは後であげる「芝蘭契」の一部として確認ができるが、管見内では二字漢語「蘭契」の用例は見いだせない。当該詩序中の「蘭契」の典拠もしくは用例に『易経』繫辞上伝が指摘されてきたのは「金蘭契」という表現が存在した為であろう。しかし「金蘭契」の初見は、管見では白居易詩である。中唐の白居易以前に「金蘭契」が存在した可能性も否定できないが、資料に従えば盛唐に相当する池主の時代には「金蘭契」はなかったと言える。つまり『易経』繫辞上伝を典拠とし、かつ「蘭契」を含む表現は池主の時代にはまだ無く「蘭契」の出典を『易経』繫辞上伝とする従来の解釈にも疑いが出てくる。

「芝蘭契」から「蘭契」へ

ところで、「蘭契」を含む言葉は「金蘭契」だけではない。

昔我芝蘭契〔楊炯「和酬虢州李司法」〕

この「芝蘭契」について考えてみる。『孔子家語』六本に

與善人居、如入芝蘭之室。久而不聞其香。既

與之化矣。

善人と一緒に居るといふことは、香草である芝蘭の

おいてある部屋に入ることと同じである。長い間そこに居ると、その良い香りを感じなくなってしまう。これは自分とその香草の香りとが同化してしまつたのだ。

とある。これとほぼ同様の記事が『顔氏家君』慕賢<sup>13</sup>および『大戴礼記』にもある。このように「芝蘭」は、「君子・優れた」という意味の比喩表現として用いられる。中国の例をあげる。

好<sup>レ</sup>我、芳若<sup>レ</sup>芝蘭。(『荀子』王制<sup>15</sup>)

且夫芷蘭生<sup>ニ</sup>於<sup>レ</sup>深林、非<sup>レ</sup>以<sup>レ</sup>無<sup>レ</sup>人而不<sup>レ</sup>芳。君子之学、非<sup>レ</sup>為<sup>レ</sup>通也。(『荀子』宥坐篇)

へあの香草の芷や蘭は奥山に生えているが、人がいないからといって芳香を放たないことはない。同様に君子の学は立身出世のためにするものではない \*芷は<sup>16</sup>芝<sup>16</sup>。

且芝蘭生<sup>ニ</sup>於<sup>レ</sup>深林。不<sup>レ</sup>以<sup>レ</sup>無人而不<sup>レ</sup>芳。(『孔子家語』在厄<sup>17</sup>)

期上徳<sup>ニ</sup>芝蘭。(楊炯「送并州旻上人詩序」)

「芝蘭」も金蘭同様「懷風藻」に見られる。

芝蘭之契接無<sup>レ</sup>由。(藤原宇合「七言在常陸贈倭判官留在京一首序」)

芝蘭四座。去三尺而引<sup>ニ</sup>君子之風<sup>一</sup>。

(下毛虫麻呂「五言秋日於長王宅宴新羅客序」)

「孔子家語」六本から「芝蘭契」を解釈すると、「徳の高い人物と交際すると相手の徳が感化して自分が一段優れた人物となる」となる。池主にとって家持は、かつての大夫一族の長、旅人の嫡男であり、越中当時は上司でもあった。自分より上席者に贈る詩序に用いる言葉としては「金蘭契」よりも「芝蘭契」の方が適している。なぜなら「芝蘭契」には相手の徳を認め、その徳に対する敬意の念が含まれる語だからである。実際に家持は書簡前日の上巳節句には参加できなかったが、健康であったなら確実に参加したのであろうし、その場合当然国守たる家持が宴席の中心人物となつたであろう。越中在任官吏間における交友関係は家持が核となつて形成されているものであり、その点からも「蘭契」は家持との交友を示す言葉と理解できる。また養老期の藤原宇合が詩序で「芝蘭之契」を使っていることから、この言葉が天平貴族にとって馴染みあるものであったことが伺える。意味的にも時代的にも「金蘭契」より「芝蘭契」の方が「蘭契」の背景にあった表現として適している。

#### 「蘭」の意義

中国文学作品において、管見の範囲内で「蘭契」が二字

のみで使われている例は確認できない。当該詩序「蘭契」についての解釈は諸説殆ど一致し、異説はほぼ見受けられない。即ち、典拠もしくは用例に『易経』繫辞上伝をあげている。『易経』繫辞上伝出典語句に「金蘭契」があるが、資料上ではこの語句の初見は白居易詩である。一方、『孔子家語』六本出典の「芝蘭契」が楊炯詩に見られる。仮に「金蘭契」が白居易詩以前に存在したとして、池主は当該詩序で「金蘭契和光」もしくは「芝蘭契和光」としなかったのだろうか。ここであらためて「七言晚春遊覽一首并序」をあげる。

上巳名辰

暮春麗景

桃花昭曠以分紅

柳色含蒼而競綠

于時也

携手曠望江河之畔

訪酒迥過野客之家

既而也

琴罇得性

蘭契和光

(以下、略)

「蘭契和光」は「琴罇得性」と対になっている。しかし「金蘭契和光」、「芝蘭契和光」としたのでは五言となって

しまい「琴罇得性」と語数が合わなくなってしまう。そこで池主は「金蘭契」から「金」、「芝蘭契」から「芝」の字を削除した可能性もある。しかしなぜ一字削除の必要性が生じた時、「金」もしくは「芝」の字がその対象となったのか。まず「七言晚春三日遊覽一首并序」のテーマである上巳節句と「蘭」の関係について考察する。

漢詩曰、三月桃花水之時、鄭國之俗、三月上巳、於溱洧兩水之上、執蘭招魂、魂除不祥。(芸文類聚)三月三日

また『毛詩』には「溱與洧、方渙渙兮、士與女、方秉蘭兮。女曰觀乎。士曰既且。且往觀乎。」(蘭)は『毛伝』に「蘭也」とある。このように上巳節句の起源と蘭は深い関係がある。詩作の際、主題と関係のある故事などを詠み込むことは重要な手法である。七言序は上巳節句が主題である。「金蘭契」もしくは「芝蘭契」から「蘭」を削除することはできなかったのだろうか。では「金蘭和光」「芝蘭和光」としなかったか。これらの三字漢語の語構成は「金蘭+契」「芝蘭+契」である。一字削除の必要性が生じたら、語構成から見ても「契」が削除対象となるのが自然である。なぜ「契」の字を削除対象としなかったのか。前掲中村論は「蘭契」は三月二日池主書簡に見られる「蘭蕙」の誤写で本来「琴罇無用、蘭蕙和光」であり、三月二日

池主書簡の「蘭蕙隔聚、琴罇無用」語順を入れ替えての反復を試みたと指摘する。「蘭契」蘭蕙」誤写説については同意しかねるが、語順の入れ替えにより音の反復を試みたとの説には注目できる。つまり、池主は上巳節句に関わりの深い「蘭」を用いること、三月二日池主書簡「蘭蕙」と音の似た「蘭契」を用いて当該詩序にて同音反復を試みたと考えられる。以上の二つの理由から、「金蘭契」から「金」または「芝蘭契」から「芝」を削除し、その結果「蘭契和光」となったのである。蘭は芳香を放つ植物であることから転じて「優れた・君子のような・朋友」の喩えとして用いられる。このような意味の「蘭」の例を初唐詩を中心にあげる。

(1) 蘭契心を同じくする交わり。優れた交友。

蘭交聚北堂（李嶠「被詩」）

蘭交永合、松契長并（盧照隣「五悲悲今日」）

(2) 蘭味朋友の交わりの深いこと。

情諧者、蘭味寧忘。（駱賓王「上梁明府啓」）

以上から分かるように「蘭」という語はそれだけで「優れたもの・朋友」を意味する比喩表現として頻繁に用いられる。たとえ「芝蘭」から「芝」を除いても「蘭」のみで

「優れた・朋友」の意は表現できる。池主の当該詩序以外で、「蘭契」が確認出来るのは、管見によれば次の二例のみである。

辞之恐謂嫌蘭契

（『本朝文粹』菅三品「為右丞相贈大唐吳越公書狀」<sup>(20)</sup>）  
秋の蘭の契を違へて奉らじとて

（仁安二年八月大皇太皇宮亮平経盛家歌合・左京入道<sup>(21)</sup>）

右の二例は本邦のものである。漢籍において確認の出来なかつた二字漢語「蘭契」が、日本文学において見出せる点は興味深い。

以上をまとめると「蘭契」に関しては、以下二通りの可能性が考えられる。

① 『易経』繫辞上伝出典「金蘭契」から「金」が削除された。

② 『孔子家語』六本出典「芝蘭契」から「芝」が削除された。

いずれにしても「蘭」自体に朋友の意がある為、一字削除は容易であった。しかし、前述したように管見で「金蘭契」が白居易詩初見であるのに対して「芝蘭契」は楊炯・字合詩にすでに見られる。「蘭契」は代匠記以来指摘されてきた「易経」繫辞上伝よりも『孔子家語』六本を典拠としている蓋然性が高いと考えられる<sup>(22)</sup>。

## 二 徳星・仙舟

次にあげる「徳星」「仙舟」は語そのものが交友の意味を持つわけではない。しかし、いずれも交友譚から出来た表現である。

### 徳星

「今日所恨徳星已少歟。(当該詩序)」の「徳星」については以下の通り説明されている。

徳星は晋の陳寔荀淑と言ふ人の故事にて、賢者の集へる事也。家持卿の独りおはさぬをあかぬ事にして、已少と言へり。(『万葉集略解』。他『万葉集古義』)

この「陳寔荀淑の故事」とは「異苑」にある

陳寔字仲弓。荀淑字季和。仲弓與諸子姪造季和父子討論。于時徳星聚。太夫奏曰。五百里内有賢人聚。

である。「異苑」の一節は、『統晋陽秋』『世説新語』『蒙求』にも収録されており、『代匠記』初稿本は「異苑」、「万葉拾穂抄」は「蒙求」、沢瀉注釈は『統晋陽秋』を典拠をして、この一文を掲げている。だが「蒙求」は中唐成立なので、除外してよいだろう。「異苑」(南北朝時代・宋代)とほぼ同時期成立の『世説新語』徳行篇では、『統晋

陽秋』出典としている。この記事は、『後漢書』陳寔伝にあるもので、それを『統晋陽秋』『異苑』『世説新語』は採録したのである。「芸文類聚」には

漢書音義云、瑞星景星。亦曰徳星。(『芸文類聚』星)とある。つまり「徳星」は瑞星を意味するわけだが、陳仲弓が荀季和と討論した際に徳星が現れたため、転じて「賢人」を意味するようになったと考えられる。管見での「徳星」の初見は『史記』の

景星者徳星也(『史記』天官書<sup>24</sup>)

である。初唐詩・李徳林詩「出門会親友。天官奏徳星」とある。親友と出会った時に、天に徳星が現れたという意味で、前掲『異苑』の一節をふまえている。また孫逖詩

徳星常有会(和韋兄春日南亭宴兄弟詩)

の「徳星」は賢人の意である。この孫逖詩は、管見において「徳星」が賢人の比喩として用いられた最も古い例である。瑞星を表す「徳星」が、初唐になると友人と出会った時に現れると詠まれ、ついには賢人の比喩で用いられるようになった。池主は、これらの初唐詩にみられる友人・賢人の比喩「徳星」をもって家持を称したのである。



## 仙舟

次に当該詩中の「仙舟」を見てみる。「桃源通海泛仙舟（当該詩・第四句）」は、池王が上巳宴で見た風景について詠んだ箇所である。この「仙舟」については以下のように説明される。

### ①『後漢書』郭符許列伝を典拠とする。

泛<sub>二</sub>仙舟<sub>一</sub>。後漢郭泰字林宗、始見<sub>二</sub>河南尹李膺<sub>一</sub>。大奇<sub>レ</sub>之。後歸<sub>二</sub>鄉里<sub>一</sub>。諸儒送至<sub>二</sub>河上<sub>一</sub>、車数千両、林宗唯與<sub>二</sub>膺同<sub>レ</sub>舟而濟。賓客望<sub>レ</sub>之、爲<sub>二</sub>神仙焉<sub>一</sub>。〔万葉代匠記〕初稿本、精撰本）\*また注釈ではないが古沢未知男氏も「仙舟」の典故としてこの郭泰伝をあげる<sup>(25)</sup>。

### ②神仙世界・仙人の舟。

「泛仙舟。恐らく漁夫の舟を、仙人の舟と誇張したのであらふが、以上此の句などは幾分かは実景があつての文飾と思はれる。（土屋文明『万葉集私注』）、「仙人の住む桃源郷は海に通じてそこに仙人の舟を浮べている。（大系『万葉集四』頭注）、「仙人の舟。曲水の宴の風景を桃源になぞらえたので、そこに浮かぶ舟も仙人のものとして述べたもの。普通には美しく飾った舟をいう。『仙舟』の用例は多いが、王勃の「三月上巳祓禊序」や「秋日楚州郝司戸宅偶餞崔使君序」にも

見える（全注）」

また、『大漢和辞典』では「仙舟」について「華麗な装飾を施した遊山船」とある。代匠記及び古沢説があげるのは、『後漢書』卷六十八郭符許列伝第五十八である。

郭太字林宗、太原界休人也。家世貧賤。早孤、母欲使<sub>二</sub>給事<sub>レ</sub>縣廷<sub>一</sub>。林宗曰、大丈夫焉能<sub>レ</sub>扱<sub>二</sub>斗筲<sub>レ</sub>之役<sub>一</sub>乎。遂辭。就<sub>二</sub>成臯屈伯彦<sub>一</sub>学、三年業畢、博通<sub>二</sub>墳籍<sub>一</sub>。善<sub>二</sub>談論<sub>一</sub>、美音制。乃游<sub>二</sub>於洛陽<sub>一</sub>。始見<sub>二</sub>河南尹李膺<sub>一</sub>。膺大奇<sub>レ</sub>之、遂相友善、於是名震<sub>二</sub>京師<sub>一</sub>。後歸<sub>二</sub>鄉里<sub>一</sub>、衣冠諸儒送至<sub>二</sub>河上<sub>一</sub>、車数千両。林宗唯與<sub>二</sub>李膺同<sub>レ</sub>舟而濟、衆賓望<sub>レ</sub>之、以爲<sub>二</sub>神仙焉<sub>一</sub>。

〈郭太は博学の人物で、その名声は京師に響いていた。その郭太は洛陽で李膺と出会い、一目で優れた人物と判断して親友となった。その後、郭太は帰郷することになったが、大勢の人々が見送ってくれたなかで、李膺と二人だけで同じ舟に乗った。それを見た人々は人品高潔な二人の友人達を見てまるで神仙のようだと言った。\*訳は新釈漢文大系による<sup>(26)</sup>〉

ここから「仙舟」が出来たと考えられる。この『後漢書』の記事は、『芸文類聚』舟にも所収されている。管見によれば「仙舟」の最も古い用例は、

仙舟李膺棹、小馬王戎鑣。（江總（陳く隋）・「洛陽道

詩)

である。この「仙舟」は初唐に入ると多くの例が確認でき  
る。二、三例を以下にあげる。

太液仙舟廻。(太宗皇帝「賜房玄齡」)

誰忍仙舟上、携手独君思。(盧照鄰「晚渡滹沱敬贈魏  
大」)

開筵枕<sub>レ</sub>徳水、輕棹<sub>レ</sub>艤<sub>レ</sub>仙舟。(駱賓王「送加少府  
探得憂字」)

太宗詩の「仙舟」は、華麗な舟の意である。盧照鄰は知人  
に贈った詩に、駱賓王は友人との別れに際しての詩に「仙  
舟」とある。どちらも友人と共にいる時の詩に「仙舟」と  
見られる点は興味深い。「仙舟」の典拠とみられる『世説  
新語』等の記事は、真の友情の尊さを語るものである。郭  
太が帰郷する際、李膺とのみ同船した様を見て人々は「神  
仙世界」と称した。「仙舟」は、友情譚から生じた言葉で  
ある。すなわち「仙舟」の背景に友情の意があるわけであ  
る。太宗、駱賓王、盧照鄰詩の「仙舟」は後漢書郭太伝の  
逸話を引いていると考えられる。また「仙舟」の類例を見  
てみると

逸人談<sub>レ</sub>発、仙御舟<sub>レ</sub>来。(高瑾「三月三日宴王明府山  
亭」)

は上巳宴詩である。盛唐の例になるが三月三日詩で

仙舟<sub>レ</sub>搖<sub>レ</sub>銜<sub>レ</sub>鑑<sub>レ</sub>中<sub>レ</sub>酣。(張說「三月三日定昆池奉和肅令得

潭字韻」)

舟同<sub>レ</sub>李膺<sub>レ</sub>泛。(白居易「三月三日禊祓洛濱」)

などでは「仙舟」、そのもととなった逸話が詠まれている。  
この白居易詩序には、「合宴於舟中」とあるので、詩中の  
宴は舟上で行われたのだろう。「仙舟」の語例が上巳宴詩  
に確認できる点に注目できる。上巳節句は、本来、三月上  
の巳日に禊祓をし、香草の蘭を摘み厄災を除く行事であっ  
た(前掲「芸文類聚」三月三日)が、王羲之「蘭亭集序」  
にみられるように、早くから享樂的な「宴」と化していた。  
唐代に入り、国家の安定とともに上巳宴も大規模に、そし  
て華美になった。やがて人工的な流れを配し、その傍らに  
座り流れに杯を流し、その杯が自分の前を流れ過ぎる迄に  
詩を詠むようになった。前掲白居易詩からは、舟上で宴し  
たことが分かる。「仙舟」は友情譚から生じたので宴席詩、  
特に舟の登場する上巳詩に好んで詠まれたと考えられる。  
本邦では、この中国伝来の行事は『日本書紀』顯宗元、二、  
三年に「三月上巳」に宴が催されたとある。史実として信  
用がおけるものとしては、『書紀』持統五年三月「三月壬  
申朔甲戌、宴<sub>レ</sub>公卿於西廳」とある。また『続日本紀』聖  
武天皇神龜五年三月には「三月己亥、天皇御<sub>レ</sub>鳥池塘、宴<sub>レ</sub>  
五位已上」。賜<sub>レ</sub>召<sub>レ</sub>文人、令<sub>レ</sub>賦<sub>レ</sub>曲水之詩。各賚<sub>レ</sub>絶十疋、

布十端。内親王以下百官使部已上祿亦有差。」とあつて、盛大な宴であつたことが分かる。「万葉集」巻十九・四一五—四一五三番は、家持が上巳に詠んだ歌である。

漢人も筏浮べて遊ぶとふ今日そわが背子花縵せよ(19)

#### 四一五三)

この「筏」は「舟」の誤りであると指摘されているが、唐代の貴族が上巳宴で舟を浮べることを家持が知っていたことが分かる。また「懷風藻」石川朝臣石足「五言春應詔」にも「戯鳥從波散、仙舟遂石巡。」とある。「仙舟」は『後漢書』郭太伝より生じた表現で、本来は同舟した郭太と李膺の友情の尊さに神仙世界を見たところから生まれた表現であつた。当該詩序「桃源通海泛仙舟」の「桃源」は桃源郷の意で、仙源、仙境ともいう。桃花の流れを遡つて武陵の桃源に出た故事は『桃花源記』『搜神後記』に見られる。つまり、「桃源(神仙)に浮かぶ舟」の意で、池主は「仙舟」を使ったのである。春花の咲くなかで友人達と上巳宴を楽しむと言つた状況を、池主は郭太と李膺の逸話の「神仙(桃源)」と同質と見なし「仙舟」を詩序に詠んだと考えられる。

#### 「徳星」と「仙舟」の関連性

『万葉拾穂抄』が「徳星」の典拠としてあげる『蒙求』

は、上古から南北朝までの著明人の伝記・逸事を収めたもので、中唐成立である。「蒙求」では、類似話を二話合わせ各四言二句で標題とし、以下、表題の内容が記されている。この「蒙求」第九十九の標題が「荀陳徳星」、第百が「李郭仙舟」で、これら二話は一对を成している<sup>(28)</sup>。つまり、「蒙求」編者、李翰がこの二つの故事を類話として捉えていた事が分かる。「異苑」で陳仲弓が荀淑の元へ討論しに行つたのは、荀淑とかねてから交際があり、彼のことを共に語るに相応しい人物とみなしていたからであろう。互いに認め合つた人物同士が討論すると、天には瑞祥である徳星が現れたのである。これは、「仙舟」の典拠となつた郭太と李膺と同様に、互いに資質を認め合う理想的な交友像が描かれていると考えられる。ここから、「蒙求」では、この二話を類話としたのだろう。また「初学記」交友部に「荀李」という言葉があり、

司馬彪統漢書曰。李膺性簡亮。無所交接。唯以同郡荀淑陳寔為時友。(『初学記』交友(事對))

と説明がある。ここから「仙舟」の由来となつた故事の人物李膺、同じく「徳星」の荀淑・陳寔は皆、潁川郡出身で友人同士であつたことがわかる。「性簡亮」な李膺は、荀淑・陳寔とのみ友人となつたのである。「初学記」交友部に載るといふことは、この三人の友情が交友の在るべき姿

と考えられていたからだろう。「蒙求」は中唐成立で池主とは直接関係はない。しかし、『蒙求』が故事・逸話集であることを考えれば、少なくとも、中唐には「徳星」と「仙舟」は類話との解釈は定着していたことが分かる。そして、「仙舟」の管見内の例が、陳（六朝）から隋代に一例のみで、初唐になってから多く確認できることから、中唐以前、すなわち初唐あるいは盛唐に既に「仙舟」と「徳星」は類話とみなされていた可能性も考えられる。

## 結

天平十九年暮春に家持と池主の間で交わされた贈答書簡のテーマが「交友」であったことは、すでに指摘されている<sup>(29)</sup>。池主の「七言晩春三日遊覧一首并序」は、詩題からも分かるように上巳宴が主題となっているが、同時に池主の家持への友情の念が詠われている。池主は、家持が見ることの叶わなかった上巳の景を詠む時に、交友の故事を典故に持つ「徳星」「仙舟」を使ったのではないだろうか。この二語は、七言晩春詩序において、意味的にも構成上からも重要な要素であり、選り抜かれた言葉であったと考えられる。また、交友を意味する言葉として「蘭契」を使つたのは、上巳の起源と蘭との関係を考慮したと考えられる。池主は、七言詩序を作る際に、当贈答のテーマである「交

友」のもと「上巳」をモチーフとして詠む為に、細部にまで気を配っていたと言えるのではないだろうか。「蘭契」の二字を含む最も古い例は、「孔子家語」六本より生じた「芝蘭契」である。「芝蘭契」の初見は初唐の楊炯詩にみられる。「徳星」が友人との邂逅を詠った詩、あるいは賢人の比喩として用いられるのも唐代に入ってからである。

「仙舟」も六朝末から隋代に一例を見るのみで、初唐から多く使われるようになった。これは池主が、初唐詩の語例を積極的に自身の作品中に投影させていたことを示している。小島憲之氏は「七言晩春遊覧一首并序」における表現を詳細に検討した上で「家持・池主の贈答の語句は、文選を中心とする六朝ものに、更に王勃など初唐ものを加へたところに中心がある。(中略)天平期に於ける萬葉集の詩文を説く場合に、文選などの六朝文学のほかに、王勃・駱賓王などを中心とする初唐の詩序類を無視することはできない。」<sup>(30)</sup>と指摘する。このように家持と池主の贈答に初唐詩文の影響がみられることは、すでに明らかにされている。現在、万葉集における初唐詩の影響については、詩句の表現を利用したにすぎないと指摘されている<sup>(31)</sup>。池主が当該詩序に利用した初唐詩句表現をその表現の背景にある典故等も含めてを見直すことで、作品解釈は深まるであろうし、池主の文学観の一面も明らかになるのではないだろうか。

注

- (1) 二、三の例を挙げれば、家持と池主の交友観を建安文学に求められるとし、「家持は、その様な文学に通暁する池主との交友を希つたのであり、対して池主は、家持の期待に応えて、建安詩壇の如き文学論を展開する。この書簡全体を貫くものは、中国文人の交友への家持の憧憬であり、また、如上の池主の文学観である」と指摘する池田三枝子氏の「家持・池主の交友観」(『古代文学』三十二号・一九九三年三月)や、家持と池主の贈答は、陸機と陸雲に於ける書簡の贈答による文学論の如き展開が行われ、倭詩という新たな文芸意識による越中賦が試みられ、さらには六朝期文学論に基づく興や物色の詩歌を試みる等、「家持文学の新たな展開を可能にした」と指摘する辰巳正明氏の「交友論(1)―交友をめぐる文章論の理念性とその展開―」、「交友論(2)―家持と池主の贈答歌―」(以上『万葉集と比較詩学』おうふう・一九九七年四月)等がある。
- (2) 中村宗彦「万葉集詩文訓詁管見」(『万葉集研究第十六集』塙書房・昭和63年11月)
- (3) 『広辞苑 第四版』岩波書店
- (4) 諸橋轍次著、鎌田正・米山寅太郎編『大漢和辞典・巻十一』大修館書店
- (5) 久松潜一校訂代表『契沖全集第六巻』岩波書店
- (6) 「蘭契」に関する説明で「易経」繫辞上伝をあげている注釈書類をあげると以下の通りである。「易の如蘭の

- 語によりて、同心の契を言ふ」(橋千蔭『万葉集略解』國民文庫刊行會編輯 國民文庫刊行會)、「蘭契和光は、友どちの親しき意なり、蘭契は易に同心之言其臭如蘭とあるによれり」(飛鳥井雅澄『万葉集古義』高知県文教協會・臨川書店)、「蘭契は親しい同士のちぎり、交わり。周易『二人同心、其利断金、同心之言、其臭如蘭』(高木市之助ほか校注『万葉集四』岩波書店)「蘭契香草の蘭のごとき君子の交わり。『周易』繫辞上に『二人同ウスレバ、心、其利断金、同心之言、其臭如蘭』とある。」(伊藤博『萬葉集釋注九』集英社)。また新編全集頭注には「君子の交わり。↓三九六七序(蘭蕙)」とあり、蘭蕙の頭注に「こは『周易』繫辞上伝に『同心ノ言ハ、其ノ臭フコト蘭ノ如ク』とあるように、親しい交わりにたとえる。」(小島憲之、木下正俊、東野治之校注訳『萬葉集四』小学館)
- (7) 橋本達雄『万葉集全注・巻第十七』有斐閣
- (8) 鈴木由次郎『易経』集英社・全釈漢文大系
- (9) 注(3)前掲書
- (10) 目加田誠『世説新語・下』明治書院・新釈漢文大系78
- (11) 竹田晃『文選(文章篇)・下』明治書院・新釈漢文大系93
- (12) 宇野精一『孔子家語』明治書院・新釈漢文大系53
- (13) 『顔氏家訓』慕賢に「是以與善人居、如入芝蘭之室。久而自芳也」とある(顔之推『顔氏家訓』東洋文庫・明徳出版社)

- (14) 『大戴礼記』に「與<sub>レ</sub>君子遊、苾乎如<sub>レ</sub>入<sub>レ</sub>蘭芷室。久而不<sub>レ</sub>聞、則與<sub>レ</sub>之化矣。」とある(栗原圭介『大戴礼記』明治書院・新釈漢文大系113)
- (15) 藤井専英『荀子・上』明治書院・新釈漢文大系5
- (16) 藤井専英『荀子・下』明治書院・新釈漢文大系6
- (17) 注(12)前掲書
- (18) 『芸文類聚・上』中華書局
- (19) 注(2)前掲書
- (20) 柿村重松註『本朝文粹註釈』富山房
- (21) 萩谷朴、谷山茂校注『歌合集』岩波書店・岩波古典文学大系
- (22) 小島憲之氏は『代匠記』の出典語句について次のように指摘している。「万葉集全体にわたって考察すれば、やはり契沖説にも出る典の誤があり、これを金科玉条としてゐる代匠記以後の注釈書はなほ再検討の要がある。契沖の万葉代匠記の出典語句の指摘には、それが必ずしも適当でないものもある。しかもなほ出典を持たない所謂『非出典語』を、誤つて出典のあることばとしてゐるものもある。ここに出典語句と非出典語句との判別が必要になってくる。」(『上代日本文学与中国文学』出典論を中心とする比較文学的考察―上』第一篇「漢籍の伝来」第五章「出典の問題」・塙書房・一九六二年三月)
- (23) 北村季吟『万葉拾穂抄』新典社
- (24) 司馬遷『史記』中華書局
- (25) 古沢未知男『漢詩文引用より見た万葉集の研究』桜楓社・一九六四年九月
- (26) 目加田誠『世説新語・上』明治書院・新釈漢文大系76
- (27) 山中裕・今井源衛『年中行事の文芸学』弘文堂・一九八一年七月、遠藤元男・山中裕『年中行事の歴史学』至文堂・一九八一年三月
- (28) 早川光三郎『蒙求・上』明治書院・新釈漢文大系58
- (29) 注(1)前掲書
- (30) 小島憲之『上代日本文学与中国文学』出典論を中心とする比較文学的考察―中』第五篇「萬葉集の表現」第十章「天平期に於ける萬葉集の詩文」・塙書房・一九六四年三月)
- (31) 芳賀紀雄氏は、万葉集における初唐詩の影響について「万葉集における唐代の詩文の受容に関して言えば、大伴家持が杜甫(七一―七七〇)と同時代であり、万葉集の後期が盛唐詩と重なるにも関わらず、盛唐詩の影響の痕跡は、ほとんど留めない。初唐詩までと見て誤りはなく、その加減は、盛唐の初期に成立した唐人選唐詩集のひとつ『搜玉集(搜玉小集)』(七二四年頃)また徐堅等の『初学記』(七二七年、あるいは七二五年)あたりまでの伝来を考慮に入れておけばよいだろう。」と述べた上で、「万葉集においては、六朝詩の場合と同じく、特定の詩人に追隨するといった傾向は認められず、おおむね齊梁詩に連続するものとして、伝来書を通じて初唐の詩句の表現を利用したにすぎないだろう。」(『別冊国文学・万葉集事典』中「万葉集比較文学事典(初唐詩)」

学燈社・平成五年八月）と指摘する。

引用本文は、『万葉集』は新編日本古典文学全集、『懐風藻』は日本古典文学大系、唐詩は『全唐詩』（中華書局）に各々拠った。

〈付記〉本稿は平成十二年度上代文学会秋期大会研究発表会（平成十二年十一月十一日、於成蹊大学）での発表に基づく。席上、御意見御教示賜りました方々に感謝申し上げます。